

記憶を形にし、継承していく ——介護現場から考える聞き書きの原点

六車 由実

プロフィール
1970年静岡県生まれ。民俗研究者
デイサービスすまいるほしむ管理
東北芸術工科大学芸術学部准教授をへて
高齢者介護の現場に身を置き、「介護民
俗学」を提唱。
おもな著書に、『神、人を喰う——人身御
供の民俗学』（新曜社。サントリー学芸賞）
『篤き介護民俗学』（医学書院。旅の文
化奨励賞）。

先日、知り合いのケアマネジャーから、以前私
が勤めていたデイサービスの利用者の山本一夫さ
ん（仮名）が亡くなったと聞き、昨日お線香をあ
げにご自宅にうかがった。

私が出会った頃の山本さんは時々暗い表情で、
「こんな年寄りになってただ生きているのは地獄
同然だ」とつぶやいていた。大正二桁生まれで氣
骨のある山本さんにとっては、生活上のほとんど
のことを他人の助けなしにはできないという現状
に絶望していたに違いない。だが、聞き書きを始
めると、「生き地獄」という絶望的な言葉とは裏
腹に、山本さんは自身の波乱万丈の人生について
雄弁に語ってくれた。とりわけ、農業の経験に
ついての語りには実に詳細だった。馬喰に高く買い
取ってもらうために作業効率の悪い朝鮮牛を飼っ
ていたこと、特産だったサツマイモの苗づくりの
ための「いもぐら」について等。そのすべてが私
には初めて聞くことばかりで、聞き書きの度に民
俗研究者の食指が動かされたものだ。山本さん
も、自分の一代記を書いてほしい、と希望を抱く
ようになっていった。

そうして二〇回を重ねた聞き書きをまとめたも
のが、『山本一夫さん 思い出の記』である。山
本さんがいう一代記になったかどうか自信はない

が、出来上がったばかりの『思い出の記』を何度
もめくっては目を潤ませていたのが印象的だった。
その一方で、山本さんは、「息子たちも読んでく
れるかな」とため息をもらしていた。きっと山本
さんは、私に語りながらも、息子さんたちご家族
に自分の生きてきた記憶を伝えたかったのだろう。
『思い出の記』はご家族にも渡したが、ご家族か
らは特に感想などは聞くことはなかった。

突然訪ねた私を山本さんの家族は快く迎え入
れてくれた。仏前にお線香をあげると、傍らに
いたお嫁さんが当時の様子を教えてくれた。『思
い出の記』を読んでもみると自分たちの知らないお
じいさんの生き方や思いが伝わってきたが、どう
受けとめていいかわからないので、当時は感想も
お礼も伝えられなかった。でも、おじいさんの葬
儀で、『思い出の記』の一部を朗読してもらった
ら、改めておじいさんの人生はすごいな、と思えた、
という。『思い出の記』を介して、山本さんの記
憶と思いが家族に継がれた、そう私は確信した。
民俗学が聞き書きをする意義も本来はこれでは
なかったのか。生活者の記憶を形にして、継承
していく。私は介護現場に身を置きながら、聞き
書きの原点とは何かを考えている。

月刊
みんぱく
9月号目次

- | | |
|---|---|
| <p>1 エッセイ 千字文
記憶を形にし、継承していく
——介護現場から考える聞き書きの原点
六車 由実</p> <p>2 特集
美麗島——台湾</p> <p>2 民族のモザイク——台湾 野林 厚志</p> <p>4 台湾の政治と中台関係 小笠原 欣幸</p> <p>5 ことばからみる台湾漢族の社会 上水流 久彦</p> <p>7 想像のふくらませ方——台湾原住民族と日本
松岡 格</p> <p>8 台湾と沖縄 宮岡 真央子</p>
<p>10 似たモノさがし
死者を弔うかたち
太田 心平</p> <p>12 みんぱく Information</p> | <p>14 地球ミュージアム紀行
歴史を織りなすキルト
鈴木 七美</p> <p>16 多文化をあきなう
マヤピニックと歩んだ一〇年、これからの一〇年
山本 純一、杉山 世子</p> <p>18 フィールドで考える
知り合いを助ける、見知らぬ誰かを助ける
浜田 明範</p> <p>20 人間学のキーワード
親密圏
加賀谷 真梨</p> <p>21 異聞逸聞
中央アジアの日本人抑留者
藤本 透子</p> <p>22 制服の世界、世界の制服
ダイビング・ショップのTシャツ
市野澤 潤平</p> <p>24 次号予告・編集後記</p> |
|---|---|